

乳幼児の捉え方や関わり方に関する一考察

—保育士は何を求め、看護学生は何を学んだのか—

中野 幸子

要 旨

本研究の目的は、小児看護学実習 I（以下、保育所実習とする）における学生の学びの実態を明らかにすることにある。研究方法は、実習終了後に指導にあたった保育士と学びを得た学生の両者に実習内容にそった質問紙を配付し調査を行った。調査対象は、3年課程看護師養成校の2年生39名と15ヶ所の公的保育所の実習指導担当保育士97名である。主な調査項目は、「実習内容全般」「乳幼児への生活の世話」「乳幼児との関係形成」についてであり、各項目の統計学的比較は、フリードマン検定を行い分析した。また、学生のみ「実習を終えて」という質問項目入り自由記述の調査を追加し項目ごとに意味内容の類似のものをカテゴリー化した。分析の結果、指導保育士の発達段階別クラス間に差異が認められ、また、看護学生は実践を通し最もしつけが難しいなどの結果が得られ、本研究により今後の小児看護学への教育的示唆と保育所実習の意義が確認された。

キーワード：保育所実習 実習指導者 保育士 看護学生 乳幼児

1. はじめに

小児看護学実習は、現在9割の看護教育機関において¹⁾、病院以外に保育所や幼稚園が実習場所となっている。本研究の調査対象となる3年課程看護師養成校は、保育所を実習の場としている。保育所は、養護と教育とが一体となつて、豊かな人間性を持った子どもを育成する場である²⁾。福田³⁾は、保育を、着せる・食べさせるなど心と身体の健康の保持にむけて関わる養育と子どもの内的可能性を抜き出し開花させる教育と、外的価値である社会化への適応である躰が一体となったものであるとする。筆者は、その考えを基盤に保育所実習の目的を、日常の

保育を通して健康な乳幼児の対象理解と成長発達を助成する関わり方を学ぶとしている。看護学生は、保育の現場で保育士の保育活動に参加し体験する中から、何を学ぶのであろうか。

実習終了後の保育士評価で看護学生は、子どもの思いに寄り添い、受け止めることはできるが子どもを引き付ける力が乏しいと評されたことがある。確かに学生側からも子どもに注意をしたり、本気で叱っても言うことを聞かないので困ったや、子ども同士のけんかの仲裁がとて難しいという声も多い。

昨今、家庭での子育てで機能の低下や地域社会の子育て文化の衰退が指摘されている。乳幼児

の生活実態調査⁴⁾において、子育ての迷いや悩みについて、0歳児では「食事」「健康に関すること」の割合が高く、1歳児以降は「しかり方」「しつけ」であり、それは5歳児まで上位を占めている。多くの母親が「しつけ方」に不安をもち幼稚園や保育所に子どものしつけを期待する母親が増えていることや、親が受容とわがまま放題させることの区別がつかず、子どもに基本的習慣を身につけさせる意識が薄いなど「しつけ」は子育ての主要な課題となっている。日常生活の中で子どもと触れ合う機会が少ない現代の若者である看護学生は、なおさら、子どもの、特にしつけも含めた関わりをととても難しいと感じるのは当然なのかもしれない。5日間という大変短い実習期間の中で、看護学生に多くを求めることはできない。しかし、特に、子どもの目線で子どもたちと関わる努力をしている学生が、大人（保育士）の立場と子どもの立場の双方をどのように捉えたのだろうか。子どもと関わるうえで看護学生に求められる能力とは何なのか。

本研究では、子どもの捉え方や関わり方について保育士は何を求め学生が何を学んだのかを明らかにすることである。保育所実習の意義や保育所実習における学生の学びについてはすでにたくさんの研究報告がなされている。保育所実習の意義は、健康な子どもの理解が深まり病児と関わりやすくなることにあるとされ、病院実習前に保育所実習を取り入れることが重要⁵⁾という研究報告もある。筆者は、保育所実習の意義を健康児への看護実践として捉え、保育の特殊性や個別な援助を学ぶことにより小児看護の視点を拓けることにあると考えている。また、

これまでの研究の多くは、保育所実習に対する学生の所感や、実習記録から学びを分析している。その結果、学生が子どもをどのように理解したかを焦点にした研究が多い。白井ら⁶⁾の研究では、学生の記録から学生の着眼点を抽出した結果、「子ども」63.4%、「学生自身」18.5%、「保育士」8.5%、その他「保育所の機能」9.6%の順に学びがあったという。

本研究は、実習終了後に指導にあたった保育士と学びを得た学生の両者に実習内容にそった質問紙を配付し調査をした研究である。これまで、保育士に看護学生の評価を依頼し調査した研究や、特に乳幼児の日常生活の世話について学生の学びの実態を明らかにした研究はまだみあたらない。

2. 研究目的

保育所実習において、子どもの捉え方や関わり方について、保育士が求めるものと学生が学ぶ実態を明らかにする。

3. 保育所実習の実施状況

3-1 保育実習の位置づけ:小児看護学の構成は、1年次後期より小児看護学概論1単位(15時間)、2年次前期に小児看護学方法論Ⅰ1単位(15時間)、2年次後期に小児看護学方法論Ⅱ1単位(30時間)と方法論Ⅲ1単位(30時間)となっている。3年次には小児病棟実習を行っている。

3-2 保育所実習期間:3年課程看護師養成校の2年次に保育所実習6日間のうち、5日間は保育所で実習し、1日は学内でまとめを行っている。

3-3 実習目標:①健康な乳幼児の成長発達と発達課題を理解する。②健康な乳幼児の生活を

り、日常生活の世話を学ぶ。③成長発達を助成する保育の方法と保育者の関わりを学ぶ。④乳幼児の健康管理と保育環境および安全対策について理解する。

3-4 実習方法：実習形態は参加・観察実習である。1ヶ所の公的保育所に学生2-3名ずつ配置している。5日間の実習では、必ず一日は、0歳児クラスを受け持つことと、子どもの成長発達を理解するために可能な限り、異年齢のクラスを順次受け持つよう保育所と調整している。ただし、施設やクラスの子どもの状況により学生のクラスの配置に関しては最終的には保育所に一任している。

4. 研究方法

2008年10月の保育所実習終了後に、実習指導担当保育士と看護学生の両者に質問紙調査を行った。

調査対象は、3年課程看護師養成校の2年生39名と15ヶ所の公的保育所の実習指導担当保育士97名である。

調査項目は、以下の内容である。

保育士・看護学生の両者に 1) 実習(指導)担当クラス 2) 実習内容全般 3) 乳幼児への生活の世話 4) 乳幼児との関係形成 について質問した。

保育士には、調査項目 2).3).4) について「指導の必要が高い」順に3段階評定してもらい郵送により回収した。

看護学生には、調査項目の 2).3) については「難しい」順に3段階評定、4) については「できた」順に3段階評定するよう説明し、実習5日間終了後の学内でのまとめの時間に行った。

各項目の統計学的比較は、フリードマン検定を行い分析した。

また、学生のみ質問項目入り「実習を終えて」のアンケートの追加調査を行い、同じくまとめの時間を実施し回収した。分析は、質問項目の「学生が自覚した子どもとの関わりの程度」「乳幼児の日常生活の世話で難しかった世話とその理由」「実習後の子どもの思いへの変化」「保育士からの学び」「実習後の保育所や保育士へのイメージの変化」とした。質問項目の自由記述の各内容については意味内容の類似するものまとめてカテゴリー化した。

倫理的配慮として、保育士には、研究の主旨と自由意思の尊重、匿名性の確保、不利益や負担は生じないこと、学生には、研究の主旨と匿名性の確保、成績には関与しないことを約束し両者に口頭で説明し書面で承諾を得た。

5. 結果

5-1 実習クラス

保育士：実習指導担当クラス

0歳	1.2歳	3.4.5歳	担任以外
25名	34名	30名	8名

学生：実習5日間で学生が経験したクラス

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
38名	32名	32名	21名	23名	21名

5-2 実習内容全般について

①実習に臨む学生の態度②成長発達の捉え方③子どもの内的可能性を引き出す関わり方や遊びの方法(教育遊び)④子どもの生活の世話⑤しつけの方法である。各項目の統計学的比較は

フリードマン検定で行い、 $p < 0.05$ をもって優位差ありとした。

実習内容全般の①～⑤の各項目は、保育の考え方や保育所実習の実習目標、実習態度（科目評価表に学生自身が自己評価する欄の責任感・積極性・協調性・礼節・健康管理の項目について）とした。

[保育士が求めるもの]

保育士が求めるものについて図1に表した。

実習内容全般について指導担当クラス別にみると、0歳児クラスの保育士（有効回答68%）が、看護学生に対して指導の必要が高いと考える順位別内容は、①成長発達 36.2%②生活の世話 25.4%③教育遊びと実習態度 17.7%⑤しつけ 2.9%であった。検定の結果は $p = 0.000$ で①～⑤項目間に統計学的な有意差を認めた。

1.2歳児クラスの保育士（有効回答82.3%）は、①教育遊び 28.5%②成長発達 24.4%③生活の世話 21.4%④実習態度 13%⑤しつけ 12.5%であった。検定の結果は $p = 0.001$ で①～⑤項目間に統計学的な有意差を認めた。

3・4・5歳児クラスの保育士（有効回答80.0%）は、検定の結果は $p = 0.183$ で①～⑤項目間に統計学的有意差を認められなかったが、①成長発達・教育遊び 27%③④実習態度・生活援助 16.6%⑤しつけ 12.5%であった。

[学生の学び]

学生の学びについて図2に表した。

実習内容全般について、学生（有効回答82%）は、実習内容全般の項目の中でとても難しいと感じた順位別内容は、①しつけ 40.1%②教育遊び 26.5%③生活の世話 21.3%④成長発達 11.4%⑤実習態度 0.5%であった。検定の結果は

$p = 0.000$ で①～⑤項目間に統計学的有意差を認めた。

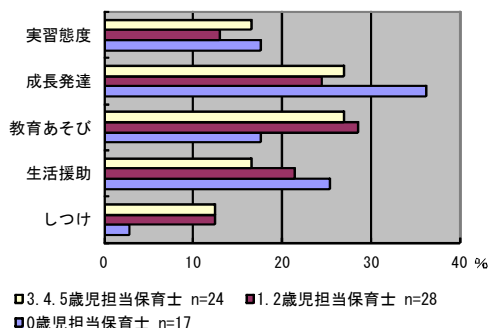


図1 保育士が学生に求める実習内容

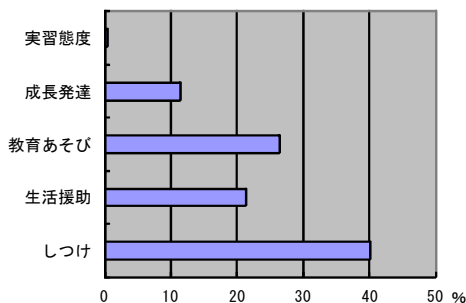


図2 学生が難しい日常生活の世話 (n=32)

5-3 乳幼児への日常生活の世話について

乳幼児への学生が実施した生活世話の内容は、①食事 ②排泄 ③午睡 ④衣類の着脱 ⑤清潔の5項目とした。

各項目の統計学的比較はフリードマン検定で行い、 $p < 0.05$ をもって優位差ありとした。

[保育士が求めるもの]

保育士が求めるものについて図3に表した。

乳幼児への生活の世話について指導担当クラス別に見ると、0歳児クラスの保育士（有効回答68%）が、看護学生に対して指導の必要が高いと考える順位別内容は、①排泄 32.3%②衣類

28.4%③食事 26.4%④午睡 6.8%⑤清潔 5.8%であった。検定の結果は $p=0.012$ で①～⑤項目間に統計学的な有意差を認めた。

1.2 歳児クラスの保育士(有効回答 76.4%)は、①食事 39.1%②排泄 26.9%③衣類着脱 16.6%④午睡 9.6%⑤清潔 7.6%であった。検定の結果は $p=0.001$ で①～⑤項目間に統計学的な有意差を認めた。

3・4・5 歳児クラスの保育士(有効回答 73.3%)は、検定の結果は $p=0.914$ で①～⑤項目間に統計学的な有意差は認められなかったが、①食事 39.3%②清潔 18.9%③衣類着脱 15.1%④午睡 13.6%⑤排泄 12.8%であった。

[学生の学び]

学生の学びについて図4に表した。

乳幼児への生活の援助では、学生(有効回答 92.3%)は、生活援助で難しい順に①食事 36.1%②排泄 30%③午睡 12.9%④衣類着脱 11.5%⑤清潔 9.2%であった。検定の結果は $p=0.010$ で①～⑤項目間に統計学的な有意差を認めた。

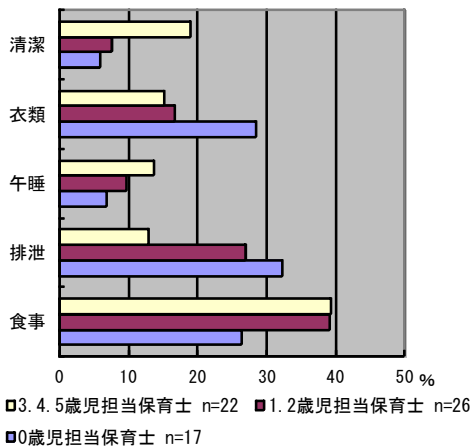


図3 保育士が学生に求める日常生活の世話

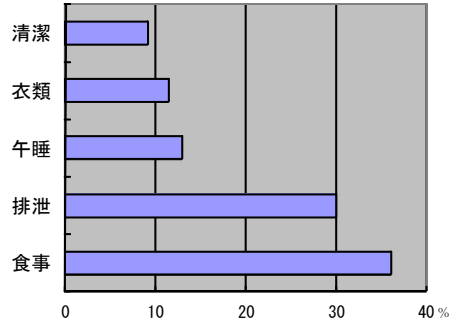


図4 学生が難しい日常生活の世話 (n=36)

5-4 関係形成について

関係形成には、①子どもの反応行動の意味 ②子どもの感情理解 ③学生の考えを伝えるの①～③項目である。

[保育士が求めるもの]

保育士が求めるものについて図5に表した。

乳幼児への学生の関係形成について、0 歳児クラスの保育士(有効回答 80%)が指導の必要が高いと考える順位別内容は、①反応行動の意味 40.1%②感情理解 38.2%③伝える 21.5%であった。検定の結果は $p=0.002$ で①～③項目間に統計学的な有意差を認めた。

1.2 歳児クラスの保育士(有効回答 79.4%)は、①反応行動の意味 40.7%②感情理解 34.5%③伝える 24.6%であった。検定の結果は $p=0.002$ で①～③項目間に統計学的な有意差を認めた。

3・4・5 歳児クラスの保育士(有効回答 66.6%)は、①反応行動の意味 40.0%②感情理解 35.8%③伝える 24.1%であった。検定の結果は $p=0.008$ で①～③項目間に統計学的な有意差を認めた。

[学生の学び]

学生の学びについて図6に表した。

学生が、乳幼児との関係形成について、学生

(有効回答 94.8%) ができた順に、①感情理解 42.7%②伝える 29.7%③反応行動の意味 27.4%であった。検定の結果は $p=0.000$ で①～③項目間に統計学的な有意差を認めた。

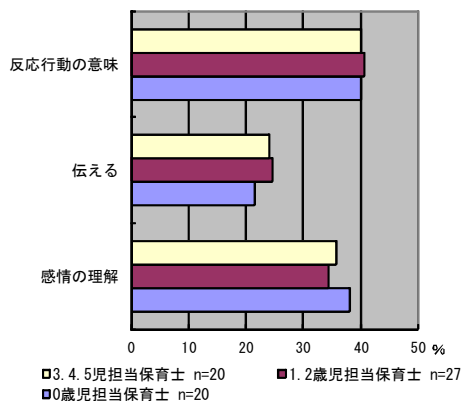


図5 保育士が求める関係形成

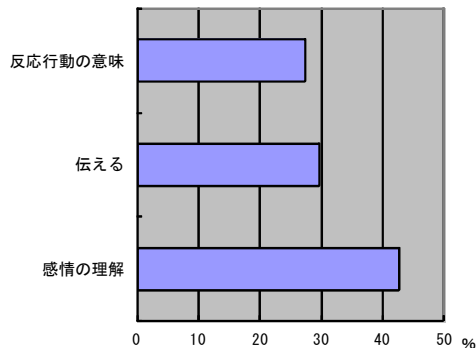


図6 学生ができた関係形成 (n=37)

5-5「実習を終えて」の質問項目入りアンケート結果

5-5-1 学生が自覚した「子どもとの関わりの程度 (手を出し身体的なふれあい)」

子どもとの関わりの程度について図7表した。

「十分」「少し」「不十分」のうち、学生39名中38名が「十分な関わり」をし、1名が「少し」であった。

5-5-2 難しかった乳幼児の日常生活の世話

難しかった乳幼児の日常生活の世話について図8に表した。

上記5-3の乳幼児の日常生活の世話の援助である「食事」「排泄」「午睡」「衣類」「清潔」に、「しつけ」と「遊び」を追加した調査である。各項目について学生に自由に記述させた。自由記述の回答を項目毎に意味内容が類似したものをまとめてカテゴリー化した。全項目の総記述数は202項目あった。最も多かったのが、「食事」41(20.3%) 次いで、「しつけ」33(16.3%)であった。以降、「衣類の着脱」32(15.8%) 「排泄」28(13.9%) 「遊び」25(12.3%) 「午睡」25(12.3%) 「清潔」18(8.9%) の順であった。

5-5-3 乳幼児の日常生活への世話で難しかった理由

乳幼児の日常生活の世話で難しかった理由について表1に表した。

「食事」については、総記述数41項目中、最も多かったのが、<子どもの好き嫌いへの対応>であった。なかなか食べてくれない児への対応である。次いで、<上手に食べる促し方>であった。これは、こぼしたり遊び食べがあったりひとつのものばかり食べる子どもへの対応である。続いて<食べさせ方>、これは、口に運ぶペースやタイミング、また、スプーンの使い方である。<関わり方>とは、気を引くような声かけや意欲を高める工夫である。その他<食べる時間>であった。

「しつけ」については、総記述数 33 項目中、最も多かったのが、＜喧嘩の対応＞で、どのタイミングで紹介してよいかや注意しても効果がないであった。次いで、＜納得のさせ方＞であり、子どもに分かりやすい言葉の使い方や伝え方がわからないであった。続いて、＜しつけ方の程度＞で、どこまでしつけしかるのかがわからないであった。続いて、＜自己の傾向＞として厳しくしかれないなどがあった。

「衣類の着脱」では、総記述数 32 項目中、最も多かったのが、＜嫌がる児の対応＞で、子どもが動く、逃げる、嫌がる児への対応である。次いで、＜自分でやらせる加減＞であった。これは、甘えてくる児の対応やどこまでできるのかの見分けであった。続いて、＜衣類の着せ方＞で腕や頭を通すのが難しいであった。

「排泄」では、総記述数 28 項目中、最も多かったのが、＜おむつ交換＞で、動く・泣く・嫌がる児のおむつの交換であった。次いで、＜排泄時のおまるへの促し＞であった。走り回るやじつとすわっていない、聞いても遊びに夢中である。続いて、＜排便排尿の察知＞で、気づきや声かけのタイミングの難しさであった。

「遊び」については、総記述数 25 項目中、最も多かったのが、＜複数の児との対応＞であった。平等に接することや同時に誘われたときの対応である。次いで、＜けんかの対応＞であった。続いて、＜変わる遊びへの順応＞＜遊ばせ方＞で、0 歳児にどのように遊ばせ喜んでもくれるかであった。また、＜安全の確保＞であった。

「午睡」については、総記述数 25 項目中、最も多かったのが、＜寝付けられない子の寝かせ方＞で

あった。

「清潔」については、18 項目中、最も多かったのが、＜歯磨き＞で、自分でやる促しや嫌がったり、動いたり口を開けてくれない子への対応であった。次いで、＜手洗いの促し＞で水遊びを始めたりその場から離れない子どもへの対応であった。続いて、＜お尻ふき＞で便で汚れたお尻の拭き方であった。

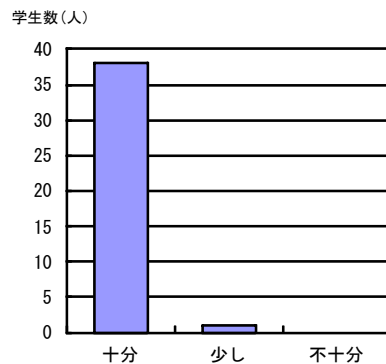


図7 学生が自覚した子どもの関わりの程度

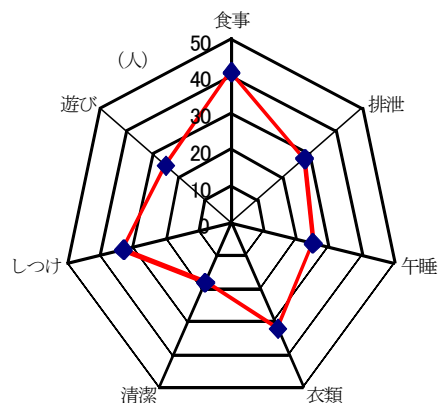


図8 乳幼児への難しかった日常生活の世話

5-5-4 保育士からの学び

保育士からの学びについて図9に表した。

実習を終えて学生は、保育士から「大いに学んだ」35人「少し学んだ」4人、「学びはない」0人であった。

5-5-5 学びの内容

学びの内容について表2と図10に表した。

実習校の保育士からの学びの内容について自由記述の意味内容の類似するものをカテゴリー化した。総記述数39であった。最も記述数が多かったのが、〈注意の仕方やしつけ〉15(38.4%)であった。次いで、〈子どもとのかかわり方〉14(35.8%)であった。〈けんかの対応〉4(10.2%)、〈遊ばせ方〉3(7.7%)、〈危険の予測〉2(5.1%)、〈手本〉1(2.6%)であった。

〈注意の仕方としつけ〉では、〈子どもの意見を聞くや理由をしめしてしかる・考える時間を与える・注目させる声かけ・時には突き放す〉などであった。〈子どもとのかかわり方〉では、〈一人ひとりの特徴を捉えている・大人の考えを押し付けない・嫌がることでも楽しく感じ取れるような関わり・経験させる大切さ・甘えを受け止める・年齢に応じて介入を調節・子どもたちの気持ちを子どもたちの言葉で表現する声かけと関わり・他の児とつながりを持たせる・歌を歌う〉などであった。〈喧嘩の対応〉では、〈少し様子を見る・全体を見る・当事者と周囲の子どもも含め考えさせる〉などであった。

〈遊ばせ方〉では、〈発達に応じた遊びの提供・子どもの喜びの理解・子どもの特徴をつかむ〉などであった。その他〈安全危険の予測〉や〈手本となる〉であった。

5-5-6 保育所や保育士に関するイメージの変化

保育所や保育士に関するイメージの変化について図11に表した。

実習を終えて学生は、保育所や保育士に関するイメージは、「大いに変わった」10人、「少し変わった」10人、「変わらない」16人であった。

5-5-7 保育所・保育士のイメージの変化の内容

保育所・保育士のイメージの変化の内容について表3と図12に表した。

保育所・保育士のイメージの変化について自由記述の意味内容の類似するものをカテゴリー化した。総記述数22あった。〈保育士の仕事の理解〉15(71.4%)〈保育所という施設の理解〉5(22.7%)その他2(9.5%)であった。

〈保育士の仕事の理解〉では、〈大変な仕事・怪我への見守りなどとても神経の使う場がある・思った以上にハードで体力が要る・子どもの体や特徴をとらえ考えて声かけや援助をしている・親とも関わり地域の関わりが大きい・観察力がある・子どもを受け止め生活を創っていく・意見のまとめ方が上手〉などであった。

〈保育所という施設の理解〉では、〈保育だけではなく、教育する所というイメージが変わった・自由なイメージからきちんと必要なしつけをしていた・年齢ごとクラスが分かれている・クラスごとの保育士の数が多い〉などであった。

5-5-8 学生の子どもへの思いの変化

学生の子どもへの思いの変化について図13に表した。

実習を終えて学生は、子どもへの思いを「肯定的な変化」27人、「否定的な変化」0人、「変わらない」12人と捉えていた。

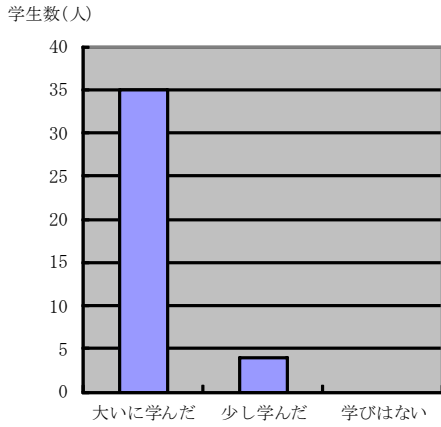


図9 保育士からの学び

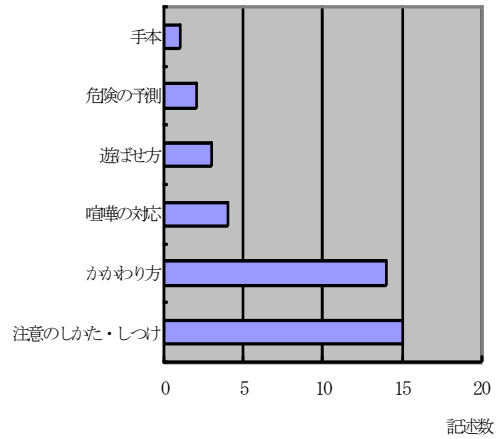


図10 保育士からの学びの内容

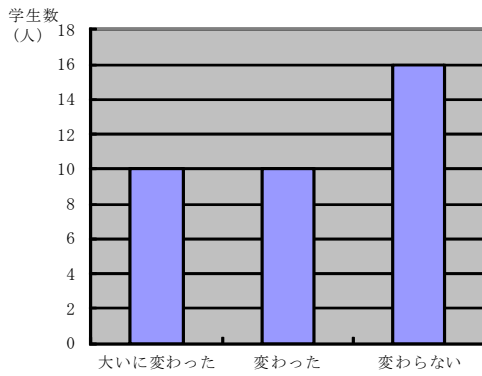


図11 保育所・保育士のイメージの変化

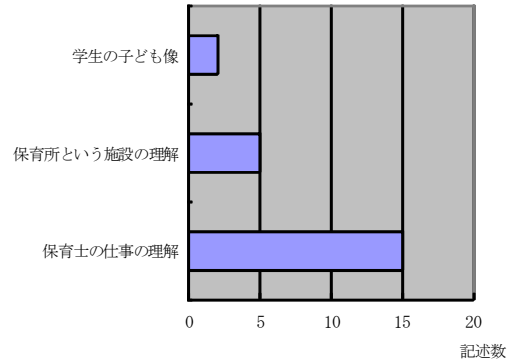


図12 保育所・保育士へのイメージの変化内容

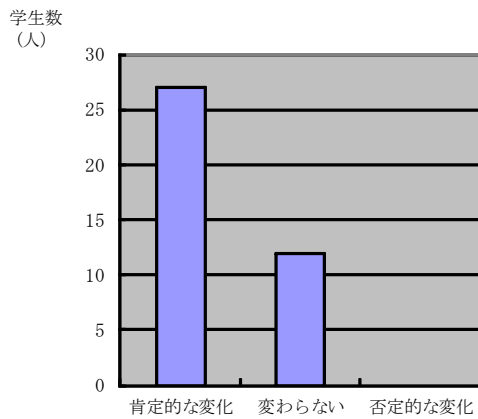


図13 実習後の子どもの思いの変化

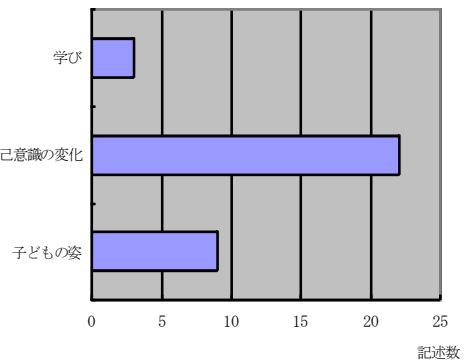


図14 実習後の子どもの思いの変化の内容

5-5-9 子どもの思いの変化の内容

子どもの思いの変化の内容について表4と図14に表した。

実習後の学生の子どもの思いの変化について自由記述の意味内容の類似するものをカテゴリー化した。総記述数は34あった。〈自己意識の変化〉22(65%)、〈子どもの姿〉9(26%)、〈学び〉3(9%)であった。

〈自己意識の変化〉では、《子どもがより好きになった・子どもと関わるのは難しいけれど楽しいものだとかわかった・自信がついた・苦手意識がすくなくなった・もっと子どもが喜ぶ遊びや楽しめることはないかと考えられるようになった》であった。〈子どもの姿〉では、《素直・活発・元気・たくましい・個性がある・意欲が強い・周囲への気づきや優しさや思いやりがある・甘える・なつく・面白い・思った以上に自立している》であった。

6. 考察

本研究では、実習終了後に指導担当保育士と学生の両者に質問紙を配付し調査をした研究である。本研究において、看護学生の子どもの捉え方や関わり方と保育所実習の意義が明らかになったと考える。

6-1 学生の実習クラスの配置について

0.1.2 歳児クラスの低年齢の乳幼児、特に0歳児クラスにおいては、38名の学生が0歳児クラスを受け持つことができた。低年齢児、特に0歳という発達の初期であればあるほど、欲求を充足する手段は全て大人に依存している。乳児の内面の欲求や思いは読み取りにくい。阿部

⁷⁾は、どんなベテランの保育者でも泣き声や表情だけで乳児の欲求を的確に読み取ることは難しく、試行錯誤を繰り返しながら、欲求していることを探りあて関わることになるかと述べている。学生には、乳児の動きや表情しぐさのひとつひとつを読み取り意味づけしていく力が求められる。子育て中の保護者の調査⁴⁾から「いつも大変であると思う」と回答する保護者は0歳児から2歳児にかけて増加し、2歳児をピークに減少し始めるという。また、0歳児を持つ保護者が子育てが大変と感じるのは「自分の時間が持てないとき」という割合が最も多いという結果もある。時間が忙しく流れる現代で、学生は、1日は、乳児と生活することにより乳児の反応や行動の意味を考え乳児の理解を深めることができる。0歳児クラスへの実習の意義は大きいと考える。

6-2 実習内容全般について

学生と保育士の両者に調査した内容は、①実習に臨む学生の態度②成長発達の捉え方③子どもの内的可能性を引き出す関わり方や遊びの方法④子どもの生活の世話⑤しつけの方法についてである。

【保育士が求めるもの】0歳児担当クラスの保育士が、最も指導が必要と学生に求めるものは、「成長発達の捉え方」であった。人の一生の中で最も成長発達が著しいのが0歳児の1年間である。0歳児の保育に関わるには、0歳児の成長発達を捉えることを保育士は最も求めていることがわかった。成長発達の基本的知識を持つことにより、子どもの姿を見て、発達の評価を的確に行うことができる。それは、阿部⁷⁾のいう育ちの見通しであり、今のこの行動は、この

子どもの育ちのどこからくるのか、そしてどこにつながるのかという見通しである。小児看護学においては、講義はまず子どもの成長発達の基本的な知識という物差しづくりから始めている。特に0歳児における「成長発達の捉え方」はとても重要であることが確認できた。次に、0歳児担当の保育士は、「子どもの生活の世話」ができる能力、つまり養育技術を学生に求めていることがわかった。乳児は、生活の全てを大人に依存している。もっともな結果だと考える。今回調査対象となった保育士らが看護学生に求めたものは、丸山⁸⁾が、保育士を目指す学生の学習課題について、発達の道筋の理解とその保障の理論、育児の具体的方法論が必要と述べていることに一致していた。

1.2歳児担当の保育士においては、「子どもの可能性を引きだす関わり方や遊びの方法」であった。3.4.5歳児担当の保育士においても同様で最も高かったが、統計学的な有意差はでなかった。子どもにとって遊びは、大人と違い生命そのものであり、生活のすべてが遊びである。生後1年を過ぎると子どもは、歩き始め、手を使い物の触れ合いや取り合いがはじまる。1歳後半には2語文を話し始める。この頃の保育は、子どもの熱中する遊びの楽しさを保育者も一緒に体験することであり、それがそのまま子どもの理解につながるのである。また、この時期には子どもの言葉を育てるという関わりも重要となる。子どもが出す声を大人が真似て応えたり、羽田⁹⁾のいう子どもの泣く笑うなどの感情の表出や自分の発した音や声が、他人に通じ他人を動かしたという便利さや満足感が子どもが言葉を使おうとする大事な動機になるなど

の教育的視点を大人が持ち、子どもと関わることを求められる。「実習を終えて」の調査で、学生は、保育所について「保育だけではなく、教育という育てるところというイメージが変わった」とある。学生は、保育には遊びを通し子どもの発達を引き出す関わりがあることを実践を通して学んだと思われる。

[学生の学び]学生は、実習内容全般で最も難しいのは「しつけの方法」であった。しかし、0歳児から5歳児の全クラスの保育士は、学生への指導の必要は最も低かった。

「しつけ」とは、庄司¹⁰⁾は、子どもの行動を正そうとする、あるいは社会性を育もうとする大人の行為だという。保育士は、看護学生には、子どもの行動を正そうとする大人の目線ではなく、子どもと一緒に遊び楽しみ子どもの目線に戻ることを求めていると思われる。しかし、学生は、子どもと関われば関わるほど、子どもの行動を正さなくてはならない場面に遭遇するのだと思われる。それは、大人の目線となり実習生としての責任感もたらずものかもしれない。本論のはじめにも述べたように、現代しつけをととても難しいと感じている人々が多いように、学生も同じである。子どもと関わる体験が少ない学生ほど、「どこまでしかってよいかわからない」「厳しくしかれない」「どのように子どもに伝えたらよいのか」「どこまで子どもに言ってよいのか」「言っても子どもはいうことを聞いてくれない」など実践の中で、学生が混乱している状況があり、最も「しつけ」が難しいという結果になってあらわれたと考える。日本の保育者の場合、しつけ、約束、決まりを教える場合、保育者のほうで強制すること

をあまりせず、そのような管理的な仕事は子どもたちに委ねることが大きいともいわれるが

11) 指導する保育士の認識と看護学生の実態との不一致については、今後調整が必要と考える。

次いで、学生は、教育遊びである「子どもの可能性を引き出す関わり方や遊びの方法」が難しいとの結果がでた。子どもの内的な力を見つめ伸ばすという視点やそれを具現化させる具体的な遊びの方法は、教育や保育の専門性に関わる分野と考える。限られた小児看護学の授業時間内では十分な内容が教授できているとはいえない。確かに、学生は、「0歳児はどのように遊ばせ喜んでもくれるのかわからない」とか、子どもと関わっていくうちに学生自ら、「もっと子どもが喜ぶ遊びや楽しめるものはないかと考えられるようになった」という。小児看護の対象は、健康不健康を問わず全ての子どもである。入院中の子どもにとっても遊びは、当然の権利でありその重要性はいうまでもない。病児の保育に専従する保育士を配置している病院もあるがその数は極めて少ない。保育所実習で子どもと関わった学生は、この分野を難しいと感じたのである。子どもと関わり子どもを理解するうえで教育的視点や遊びは、小児看護学において重要な学習内容であることが改めて確認できた。

6-3 乳幼児への日常生活の世話について

学生と保育士の両者共通の調査と、実習終了後の「実習を終えて」の学生の自由記述による質問紙調査の結果から以下を考察する。

「実習を終えて」の調査の中には、乳幼児の日常生活の世話で学生と保育士の両者から調査し

た①食事②排泄③午睡④衣類着脱⑤清潔の5項目のほか、「しつけ」と「遊び」の2項目を追加している。

【保育士が求めるもの】0歳児担当の保育士は、最も指導が必要と学生に求めている世話は、「排泄」であった。保育所から実習前に、おむつ交換は、学生に必ず練習させておいてほしいといわれる技術である。学生の「実習を終えて」の調査で、排泄の中では、おむつ交換の困難さについての記述数は最も多い。おむつ替えについて学生は、「学校で練習したが、手足をばたつかせたり動いたりし正しく当てるのは難しい」など、動く・泣く・嫌がる児のおむつ替えに学生は、おむつを正しく当てることに四苦八苦している様子が伺える。おむつ交換は、子どもに気持ちいいという快感を提供するとともに、子どもと保育者が見つめあい、ほほ笑みをかわし、肌をふれあう機会となり、子どもと保育者の大切なコミュニケーションの場でもある。学内では、語りかけながらおむつ交換の演習をしている。しかし対象は人形であり反応はない。おむつを正しく当てる方法に始終しがちな学生の傾向がわかり、おむつ交換は、大切なコミュニケーションの場であることを改めて学生に認識させなければならない。その他、排泄においては、学生は「おまるからすぐ立ち上がろうとする児の対応に困った」など、トイレトレーニングについての対応に困惑している。1歳以降になると歩行も完成し子どもは楽しい遊びの妨げになる排泄への誘導を「いや」と拒むことが多くなる。また、初めて座るトイレという空間や便座に子どもは違和感や不安を感じ、なじむまで時間がかかる¹²⁾といわれる。子ども

の不安や驚きの気持ちを推察し受け入れることも排泄の世話なのである。臨地での実践とは、学内で学んだ方法をそのとおり対象に当てはめるだけではなく、対象の反応や行動の意味を探り読み取るまで学ぶ場が実習であることがわかる。

1.2 歳児担当の保育士が、最も指導が必要と学生に求めた世話は、「食事」であった。統計学的優位差は認められなかったが 3.4.5 歳児担当保育士においても食事が最も高かった。乳幼児の生活実態調査⁴⁾において保護者の子育ての迷い・悩みに「食事」は上位にきている。

【学生の学び】学生と保育士の両者の調査において、学生が生活の世話で最も難しいと回答したのは、「食事」であり、次は「排泄」であった。また、「実習を終えて」の生活の世話の中で自由記述の最も記述数が多かったのも「食事」であった。「食事」の世話で学生が難しいとした理由の中で最も記述数が多いのが子どもの「好き嫌いへの対応」であった。「なかなか食べてくれない、どう対応してよいかわからない」などや、「上手に食べる促し方」では、「こぼす」「遊び食べ」「ひとつのものばかり」などや、その他「食べる時間」「食べさせ方」に困っていた。授乳や食事は一日に何度も繰り返される。「食」という場面を通して学生は様々なことを学習する機会を得たと思われる。「上手に食べてほしい」「たくさん食べてほしい」という学生の願いが優先しすぎないよう子どもが安心して喜んで食べられるような関わりが求められる。矢吹¹³⁾は、乳幼児期、ことに低年齢児の口唇の生理は人格の形成に深く関わり、与えられたものを取り入れることが子どもの課題であ

り、また、大人は、取り入れられるように与えることが課題となるという。乳を吸い、乳を与えるから、子どもと大人のコミュニケーションが始まるのである。小児看護学で学ぶ食の意義や子どもの栄養の特徴、調乳授乳、離乳食の食べさせ方などの講義のみでは生きた知識とはならない。取り入れられるように与える、「食」のコミュニケーションを実践できるのが実習である。

乳幼児の日常生活の世話で、食事・排泄というのは、保育士は学生への指導の必要が高い世話であり、学生にとっては難しい世話となることがわかった。

6-4 関係形成について

保育士と学生の両者への共通の調査で、関係形成には、①子どもの反応行動の意味②子どもの感情理解③子どもに伝える3項目がある。

【保育士が求めるもの】保育士の0歳児・1.2歳児・3.4.5歳児のすべてのクラスの保育士の回答は統計学的優位差がでた。

関係形成において指導が最も必要と学生に求められたのは、「子どもの反応行動の意味」であった。次は、「子どもの感情理解」であり、続いて、「子どもに伝える」という順であった。この結果は、全クラスの保育士の回答結果であることから、保育士の子どもの捉え方や関わり方の基軸となっているものであると思われる。

【学生の学び】学生は、実習で最もできたとするのは、「子どもの感情理解」であり、次は、「子どもに伝える」であり、続いて、「子どもの反応行動の意味」であった。

「実習を終えて」の学生の調査から、1名の体調不良の学生を除きほぼ全員が子どもと十分な

関わりをしていたと学生は自覚している。そのうえで学生が最もできていたのは、「子どもの感情理解」であった。子どもの表面化した感情に共感したり子どもの感情を理解しようと努力することはできた。しかし、保育士が最も求めていた子どもの「反応行動の意味」は、最も下位であった。秋田¹⁴⁾は、ヴァンダー・ベンの保育者の熟達変化の道筋を示した5段階モデルを紹介している。第1段階の「実習生・新任の段階」は、実践を自分自身の過去の経験や価値判断のみで対処し、ある状況で起きた行動の原因や生起の過程をいろいろな視点で説明や探求しようとしないう段階であるという。初めて保育所で子どもと関わった看護学生はこの第一段階の実習生であり、子どもと関わることに長けた保育士との違いが明確に出て興味深い結果となった。

その他、保育所実習から、どのような学びをしたのかについて、学生にのみ実施した「実習を終えて」の自由記述の質問紙の調査から、「保育士からの学び」「保育所や保育士のイメージの変化」「子どもへの思いの変化」について考察する。

6-5 保育士からの学びについて

保育士から学びのない学生はいなかった。わずか5日間という実習期間中に学生は、保育士から様々なことを学んだと思われる。保育士からの学びで、最も記述数が多かったのが、＜注意の仕方としつけ＞の方法であった。実習内容全般で学生からは、「しつけ」が最も難しいという結果がでたが、学生が保育士とともに活動に参加することにより、保育士の＜子どもの意見を聞くや、考える時間を与えるや、時には突き放す＞など、保育士の子どもへの関わりを参加観

察してその答えを探し得ることができたと思われる。また、保育士の＜子どもとの関わり方＞については、＜大人の考えを押し付けない・嫌がることでも楽しく感じ取れる関わり・経験させる大切さ＞などを学んでいる。その他、＜喧嘩の対応＞や＜遊ばせ方＞についても保育士から学んでいる。

6-6 実習後の保育所や保育士のイメージの変化について

学生は、保育士は、単に＜子どもを見守り世話をするだけ＞のイメージから、＜大変な仕事・親とも関わり地域の関わりが大きい・観察力がある・意見のまとめ方が上手＞など＜保育士の仕事の理解＞を深めることができた。昨今、保育士も医療チームのメンバーとなっている現状から保育士という仕事の理解ができたことはよかったと考える。また、学生は、保育所について＜保育だけではなく教育する所というイメージが変わった・自由なイメージからきちんと必要なしつけをしていた＞とあり保育所という施設の理解もできた。

6-7 実習後の子どもへの思いの変化について

学生は、子どもと関わることにより、まず、＜自己の意識の変化＞に気づいたようだ。＜苦手意識が少なくなった・自信がついた＞などである。続いて、＜子どもの姿＞において、＜思った以上に自立している・たくましい・意欲が強い・周囲への気づきや優しさや思いやりがある＞など子どもの理解が深まった。実習後の子どもへの思いの変化については、多くの先行研究がそうであるように否定的な思いに至った学生はおらず子どもを肯定的に捉えられるようになっていた。

表1 乳幼児の生活の世話で難しかった理由

項目	カテゴリー	主な記述内容
食 事 (41)	子どもの好き嫌いの対応 (15)	・どのくらい無理して食べてもらえばよいか
		・苦手な食べ物をなかなか食べてくれない
		・離乳食を食べ終えていないのに口を閉じ前掛けをはずし泣いている
	上手に食べる促し方 (9)	・喋ったりこぼさないよう促すこと
		・おかずにお茶を入れ注意しても聞かない
		・食べ物をすぐ投げるので離乳食を食べさせるのは難しい
		・一つのものばかり食べないよう皿の位置を変えても嫌がる
	食べさせ方 (5)	・どのくらいのペースで口に食べ物を運んだらよいか
		・スプーンの使い方
		・誤嚥していないか不安
食べる時間 (4)	・食べさせるスピードがつかめない	
	・時間内に食事を終えること	
関わり方 (5)	・どうしたら食べることに集中するか	
し っ け(33)	喧嘩の対応 (10)	・一度注意してもまた同じことをする
		・どちらを叱ればよいのかわからない
	納得のさせ方 (9)	・どのように声をかければそれがいけないと伝えられるか
		・ダメといえてもなぜダメかを伝えられていない
しつけ方の程度 (7)	・どこまでしかってよいのかわからない	
自分自身の傾向 (6)	・厳しくしかれない	
	・きつく叱るとその子の豊かな成長を妨げる気がして言えない	
衣 類 (32)	嫌がる児の対応 (21)	・一度着せた服をまた脱ぐ
		・動くのでスムーズに着替えられない
	自分でやらせる加減 (7)	・子どもに自分でやらせる加減が難しい
		・できる児とできない児の見分け方が難しい
		・できるのに甘えて「やって」と言われた時の対応が難しい
衣類の着せ方 (4)	・頭や腕を通すのにうまくいかず苦戦した	
	・ズボンがはかせにくい	
排 泄 (28)	おむつ交換 (17)	・学校で練習したのに手足をばたつかせ動くのでおむつは難しい
		・泣かれるとかわいそうに思ってしまう
	おまるへの促し (8)	・おまるから直ぐ立ち上がり座ってくれない

		<ul style="list-style-type: none"> ・走り回っておまるへの促しが大変 ・遊びに夢中でなかなか行こうとしない
	排便排尿の察知 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・行きたくないといったのに失禁した
遊 び (25)	複数の児との対応 (13)	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の児がそれぞれ違う遊びをしようというが対応に困った
	喧嘩の対応 (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・「入れて」という児に「いやよ」という反応での対応 ・けんかをした児をとめること
		<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに遊びの内容が変わるのでそれに順応していくのが難しい
	遊ばせ方 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児はどのように遊べば喜んでくれるのかわからない
	安全の確保 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・安全を守ること
午 睡 (25)	寝ない子の寝かせ方 (25)	<ul style="list-style-type: none"> ・からだのどこをとんとんすればよいか分からない ・とんとんしても一向に寝る気配がない
清 潔 (18)	歯磨き (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・歯ブラシの仕上げのとき口を開けてくれない ・歯が小さいので磨きにくい
		<ul style="list-style-type: none"> ・手洗いしない子への声かけ ・手を洗い始めると遊びがやめられない
	手洗いの促し (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・手洗いしない子への声かけ ・手を洗い始めると遊びがやめられない
	お尻ふき (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・便などで汚れたお尻ふき

表2 保育士からの学びの内容

カテゴリー	主な記述内容
しつけの仕方 (16)	<ul style="list-style-type: none"> ・注意する時子どもの目をよく見つめなぜそんなことをするのかちゃんと子どもの意見を聞く ・周りにこんな迷惑がかかることを分かりやすく説明する ・子どもに考える時間を与える ・理由を示してしかる ・年齢があがるにつれていくら駄々をこねても甘やかさない ・甘やかすことと優しいでは意味が異なり子どものことを一番に考えいけないことはいけない ・言うことを聞かない児に対して時には突き放すような対応も必要なことがわかった ・注意の仕方や促し方や注目させる時の声かけが上手だった ・厳しすぎるくらいきつく関わらなければいけないこともある
	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい子と人くりにするのではなく、それぞれの特徴を捉え、接し方や促し方を変える ・皆同じではなく、ひとりひとりの体調や気持ち、個別に対応している ・児を尊重し大人の考えを押し付けない ・児の発達に合わせ、児の自発性を尊重した声かけを学んだ

	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌がることもできるだけ楽しいと感じ取れるように関わっていた ・子どもたちの気持ちを子どもたちの言葉で表現できるような声かけをしていた ・常に分かりやすい言葉で歌を歌うなど児の機嫌をよく保たせていた ・甘えたい部分を受け止めつつ意欲を大切に育てるという次につながる援助をしていた ・他の子とつながりを持たせていた ・手つかみで食べたり衣服のよごれもあるが様々なことを経験させる大切さを学んだ ・年齢にあわせ保育士の介入の度合いを調節していた
喧嘩の対応(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・少し様子を見たり、全体を見ている ・どちらが正しいのかだけで解決せず当事者や周りの子どもにも考える機会を与えていた ・大人側が解決策を提案するのではなく子どもたちに考えさせ行動させるようにしていた
遊ばせ方(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの喜ぶことを理解していて発達に応じた遊びを提供していた ・子どもの特徴をつかんでいて遊び方に工夫があり関心をひく遊ばせ方の技術は勉強になった
手本(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・体操し踊るとき、手から足先までピンとし手本となっていた
危険の予測(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・常に児に注意を払い危険がないか確認している

表 3 保育所や保育士へのイメージの変化の内容

カテゴリー	主な記述内容
保育士の仕事の理解 (15)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがたくさんで平和で楽しそうと思っていたが、それだけではなく、排泄の世話や食事の片付け、怪我への見守りなどたくさん神経を使う場があり、思った以上に大変だと分かった ・保育士の仕事は思った以上にハードで体力の要る仕事だと思った ・子どもだけではなく子どもの親とも関わりや地域との関わりが多いと学んだ ・環境にも目を向け子どもの目線で物事を捉え危険を予測し判断し行動していた ・毎日の子どもの細かい変化に気づいてとても観察力があると思った ・子ども同士の意見がわかれ、そのときの保育士のまとめ方はとても上手だった ・子どもの世話をするというイメージしかなかったが、障害を見つけたり全うな大人になるよう考えて接しているのが分かった ・母親の代わりに子どもを受け止める存在であり、その子の生活を創っていく人
保育所の施設の理解 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所は自由なイメージがあったがきちんと必要なしつけをしていた ・保育だけではなく、教育という育てるところというイメージが変わった
その他(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと馴染めないのではないかと考えたが一緒に楽しく遊び快く受け入れてくれた

表4 子どもへの思いの変化の内容

カテゴリー	主な記述内容
自己の意識の変化(22)	・子どもへの苦手意識がなくなった
	・実習に行くまでは子どもは好きではなかったが今はとてもかわいいと思える
	・もっと子どもが喜ぶ遊びや楽しめるものはないかと考えられるようになった
	・子どもにとっても愛着が持てるようになった
	・直ぐ泣くイメージがあったが泣き顔より笑顔の印象がとて強く人を癒す
	・前から子どもは好きだったがより好きになった
子どもの姿(9)	・思っていた以上に素直で活発で友達思いの優しさを持っていた
	・たくましい、元気だなと思った
	・思った以上に自立していてすごいと感じた
	・かわいいだけではなく日々の変化が面白いと思った
	・もっと手助けがいると思ったがその逆で自分でやりたいという意欲が強い
	・小さいときから周りへの気遣いや優しさや思いやりがあること知った
学び(3)	・乳児から信頼関係を形成するのが大切だと思った
	・児の接し方、注意の仕方、観察の視点や声のかけ方すべてが勉強になった

7. 結論

保育所実習により、子どもの捉え方や関わり方について学生の学びの実態を明らかにするために、実習指導担当の保育士と学生に調査を行った結果、以下の結論を得ることができた。

7-1 乳幼児との関わりにおいて、学生は、子どもの成長発達の道筋をとらえ、子どもの可能性を引き出す教育的視点や遊びを实践できる力が必要であることがわかった。

7-2 乳幼児への日常生活の世話においては、保育士は、学生への指導の必要が高い項目として排泄・食事をあげた。学生にとっては、それらは、難しい世話の上位を占めることがわかった。また、学生は、学内で学んだ世話の方法をそのまま子どもに当てはめることだけに始終す

る傾向がみられた。

7-3 子どもとの関係形成において、学生は、子どもの感情を受け止めることはできるが、子どもの反応や行動の意味を理解するまでにはいたらないことがわかった。

7-4 実習内容全般で、0歳児から5歳児の全クラスの保育士が「しつけ」について学生への指導の必要は最も低いとしたが、一方、学生は、子どもと関われば関わるほど子ども目線から、大人目線となり子どもの行動を正す「しつけ」場面に遭遇し、それが最も難しい子どもとの関わりであることがわかった。しかし、学生は、保育活動に参加観察することにより保育士から「注意の仕方やしつけの方法」や「子どもとの関わり方」などについて自ら学んでいた。

7-5 実習後、学生は、子どもに対して「自己意識の変化」が最も多くみられ、多くの学生が子どもを肯定的に捕えられるようになっていた。また、実習を通し、学生は、保育士の仕事の理解や保育所という施設の理解ができた。

以上、本研究により、小児看護学への教育的示唆が得られたと同時に、保育所実習の意義を再確認することができた。また、今回、子どもに関わる専門家である保育士から得られた調査結果は、戸惑いや不安をもつ子育て中の、とりわけ低年齢児をもつ保護者にも参考になるものと考えられる。

文献

- 1) 濱中喜代他；小児看護学における臨床実習の実態，その1，実習施設の状況と学習課題を中心に日本看護学教育学会誌 4(2)，72-73，(1994)
- 2) 武藤英夫；第1章 総則 保育所の役割，厚生労働省（編）；保育所保育指針解説書，フレール館，(2010)
- 3) 福田垂穂；保育制度の現状と問題点，岡宏子・小林登る（編）；保育学読本，14増刊，144，日本評論社，(1982)
- 4) 根津牧子他；乳幼児の生活実態と保護者の子育て意識について，川崎市乳幼児の生活実態調査から，川崎市総合教育センター 研究紀要，No. 22，21-26，(2008)
- 5) 遠藤芳子他；小児看護学（幼稚園）実習の有効性の検討 Yamagata Journal of Health Science，7，34，(2004)
- 6) 臼井徳子他；保育所実習における学びの分析 三重県立看護大学紀要，4，109-113，(2000)
- 7) 阿部和子；乳児保育の基本となる考え方，阿部和子（編）；演習乳児保育の基本，9，萌文書林，(2007)
- 8) 丸山美和子；保育士養成の今日的課題 これからの保育士に求められる専門性について 月刊『保育情報』No. 273，NOV，(1999)
- 9) 羽田紘一；体験の中で育つ言葉の力，児童心理，70-71，金子書房，(2008)
- 10) 庄司順一；子ども虐待，乳児保育 10 版，37，南山堂，(2009)
- 11) 内田伸子他；ベーシック現代心理学 第2巻 乳幼児の心理学，221-222，有斐閣，(2005)
- 12) 山王堂恵偉子；排泄，阿部和子（編）；演習乳児保育の基本，73，萌文書林，(2007)
- 13) 矢吹省司；飲食行動の発達と臨床，岡堂哲雄（編）；小児ケアのための発達臨床心理，129-130，へるす出版，(1996)
- 14) 秋田喜代美；保育者のライフステージと危機ステージモデルから読み解く専門性（特集 保育者の成長と専門性）発達，21，83，9-15，ミネルヴァ書房，(2000)

(受理 2011年7月16日)